

梁塵秘抄の歌一首とその作者推論

鈴木 一男

梁塵秘抄の歌謡中、一番よく知られているのは、「舞へ舞へかたつぶり」と「遊びをせんとや」の歌であらう。

遊びをせんとや 生まれけむ 戯れせんとや 生まれけむ

遊ぶ子どもの 声聞けば わが身さへこそ ゆるがるれ

この歌について、小西甚一博士が『梁塵秘抄考』で「平生罪業深い生活を送つてゐる遊女が、みづからの沈淪に対しての身をゆるがす悔恨をうたつたものであらう」と述べられたが、今日の注釈書類では、無心に遊ぶ児童の天真爛漫の声を聞いての感懐としている。

筆者はこの歌の用語から歌の作者を仏典に親しんでいる階級層、僧侶またはそれに近い教養をもった知識人ではあるまいかと想像している。以下その根拠となる点を述べてみることにする。

この歌の前半は類似の表現の繰返しからなるが、その中の「あそび」と「たはぶれ」は殆ど同義で、漢字の「遊」と「戯」に相当しこの二字を合せると、「遊戯」という熟語が成立する。この語は仏典では「ユゲ」と音声し、法華経にはしばしば使用されている。

衆生その中に没在して、歡喜し、遊戯して覺えず（譬喩品）

諸天の もしは行し、坐し、遊戯し、及び神變する（信解品）

仏教語大辞典には「菩薩の自由自在な活動。とくに仏国土から仏国土への移動。仏の境地に徹して、それを喜び楽しむこと。心のままに無礙自在であること。ゆきき。遊化とも書く」と説明がある。

遊戯に対し仏教徒は「あそびたわむれる」というよりもっと深い意味をもたせていたものと思われる。こどもこの意味にとりたいたい。

次に、この歌の語法に「―とや―む」の形が使われている。この形は必ずしも珍しい形ではない。例えば伊勢物語に次の例がある。

さすがにあはれと思ひけん (十四段)

大原や をしほの山もげふこそは 神世のことも思ひ出づらめ

とて、心にもかなしと思ひけん、いかが思ひけん、知らず

かし (七十六段)

しかし、漢文訓読の場合に特別に現れる語法である。この「や」は疑問の意味を持つ語で、漢文訓読には、文末には多いが、文中で

は稀にしか使用されない。その上、疑問副詞「為」を「モシ」と訓じたとき「モシトヤム」の形で現れる。「為」字は「為一、為一か」「為一」と句の最初に来て、疑問文を構成する場合が多い。

「是人於中生疑為有為無一は成実論中の文であるが、天長五年点では、「是(の)人、(コレ)が中に疑を生じて、為(し)有か、為し無かとす。」(巻十五)と訓じている。

空海の性靈集補闕抄卷十に次の句がある。

公 是聖化耶。為当凡夫耶。(答)叡山澄法師求理趣釈經書

醍醐寺本を底本として訓読した日本古典文学大系本には、「公、是れ聖化なるか、為当凡夫なるか」とあるが、もとの写本には「凡夫」の左下に「トヤセン」の書きこみがある。

疑問副詞「為」字は仏典に使用例が時々あり、多くは「モシ」と読むが、「サダメテ」「コレハ」とよむこともある。『大坪併治教授退官記念國語史論集』所収の三保忠夫氏の「訓読語法史における疑問副詞『為』の訓について」が精しい報告である。

この論文は法華經に関する古点本を利用してその訓法をのべたもので、次のように結んでいる。(③)⑤は省略)

①平安初期に「為一カ・ヤ」と読んでいる。

②平安中期以降、後期・院政期、鎌倉時代になると、この訓法は南都古宗や真言宗小野流の訓読圈に偏って存続するに留まる。

③動詞「為一ヤ」とサダメテ・マサニなどの訓法とは同列に扱

い得ないわけだが、動詞訓は平安初期に於ける使用例は少なく、訓法模索中の加点例と見做される。それが、いわば萌芽ともなり、次期以降に漸増していくのである。

法華經の用例を主にして疑問副詞「為」字を含むものを示してみ。三保氏の示されたものの外に、鎌倉期の仮名書き写本や江戸期の和刻本の例を加えることにする。(兜木正亨博士蔵本による)

(竜) 龍光寺本、明算(一〇二一)加点(大坪併治博士調査)

(立) 立本寺本、寛治元年(一〇八七)加点(門前正彦氏調査)

(胡) 胡蝶装本、鎌倉期書写(久)久保本、鎌倉期書写

(足) 足利本、元徳二年(一三三〇)書写、影印本による。

(和) 和刻本かながき法華經、無刊記、江戸時代

一。仏坐道場 所得妙法 為欲說此 為当授記 (序品)

(竜) 得(たま)へる所の妙法、為(め)て此(れ)を説(かむ)と欲してか、為(め)て当に授記(し)たまはむとか。

(立) 得(たま)へる所の妙法、為(め)て此(れ)を説(かむ)と欲(ほ)すか、為(め)て当に授記(し)たまはむとか、

(久) 道場に座して えたまへるところの 妙法(めうぼう)これをと

かんとやせむ。まさに授記(しゆき)したまふへしとやせむ。

(足) ほとけ道ちやうにさしてゑたまへるところの妙法、これを

とかんとおほすとやせん、まさにしゆきしたまうへしとやせむ

(和) ほとけ道場に坐して。えたまへるところの妙法。これをと

かむとおぼせりとやせむ。まさに授記じゆきしたまふべしとやせん。

二。我今自於智 疑惑不能了 為是究竟法 為是所行道方便品

(山田本) 我今自(る) 智に於て疑惑して了すること能(は)不(す)

為(し) 「為(む)」是は究竟の法力(なりとや) 為(し) 「為(む)」

是は所行の道力(なりとや)

(立) 我(ま)今自ら智に於て疑惑(し)て 了(ま)ルこと能(は)不(す)

為めて是レ究竟の法か 為(め)て是レ所行の道か。

(足) われ、いま、みづからちにをきてうたかひまとひをして、

さとることあたはず。これくやうのほうとやせむ。これ、じよきやうのほうとやせむ。

(和) われいまみづから智において疑惑(じゆく)して さとることあたはず

これ究竟(くきやう)の法とやせん。これ所行(しよきやう)の道とやせん。

三。為大徳天生 為仏出世間 而此大光明遍照於十方(化城喻品)

(立) 為(コレ)是也大徳の天の生レタルカ為(仏)の世間に出タマヘルカ

(久) 大徳(たいとく)の天(てん)の生(しやう)せるとやせん ほとけの世間(せけん)にいてたまへる

とやせん

(胡) 大徳(たいとく)の天(てん)の生(しやう)せるとやせん ほとけの世間(せけん)にいてたまへる

とやせん

(足) 大とくのでんのしやうせるとやせん 仏のせけんにいてた

まへるとやせん しかも此の大光明あまねく十方をてらす

右の訓読によって判明するごとく、竜光院本と立本寺本は「為」

字を「さためて」と訓じているが、久保本以下足利本および江戸期

の和刻本にいたるまで、「為」字を動詞によんで、文末を「——と

やせん」に統一した訓法となっている。この訓法は、平安初期加

と認められる山田本の別訓として、「是は究竟の法なりとや為(む)」

にあらわれているものである。ただこの別訓の加

点時期は明らかでない。恐らく最初の加

点よりも年代が下るものであろう。

ともかく鎌倉期の多くの資料に「——とやせむ」が使用されてい

るのは注目すべき点である。

「為」字をもつ疑問文の訓法が鎌倉期に「為」字を副詞訓によま

ず、文末に「——とやせん」と訓する形式が成立していることと梁塵

秘抄のこの歌謡の形式とを比較してみると、類似点が認められる。

筆者はこの点に注目して、この歌謡の作者は、仏典の「為」字を

もつ疑問文の形式と同一発想の上でこの歌謡を作ったと推定したく

思う。そうすると既述の「遊戯」の背景に仏典を予想することと相

まって、いよいよ遊女の感慨を述べたとみる説を否定し、僧侶また

は、仏徒の誰かの作と認めたいような気がしてならないのである。

(吾郷先生がこの歌について度々論文を書いておられるので、驥

尾に付して雑考をまとめた次第。)

(奈良教育大学名誉教授)